

大学・附属学校園連携プロジェクトの成果と課題 ー2022年度に実施した附属学校園アンケートの分析からー

鈴木 一成* 真島 聖子** 小塚 良孝***

*保健体育講座

**社会科教育講座

***外国語教育講座

Achievements and Challenges of the Collaborative Project between Aichi University of Education and its Affiliated Schools - Analysis of the questionnaire conducted in 2022 at the affiliated schools -

Kazunari SUZUKI*, Kiyoko MAJIMA** and Yoshitaka KOZUKA***

*Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

**Department of Social Studies Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

***Department of Foreign Languages Education, Aichi University of Education, Kariya, Aic, 448-8542, Japan

Keywords：大学 附属学校園 連携 アンケート調査 活用

I 目的

2021年3月策定の「未来共創プラン」は「愛知教育大学は、子どもと共に、学生と共に、社会と共に、附属学校園と共に、未来の教育を創ります」というビジョンのもと、3つの目標と9つの戦略がある。その目標の1つである「大学と附属学校園との連携強化を図ることで、より質の高い教員研修を実現する」を受け、戦略6として「教育委員会や教育現場との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組むこと」を掲げている。そして、第4期中期計画の評価指標20-2として「附属学校園の研究等を公立学校に活用したかどうかを調査するアンケートを実施し、アンケート結果に基づいた改善策を考え、改善のサイクルを令和6年度までに構築し、令和7年度からは、構築したサイクルに基づき改善を行うこと」を設定している。

本稿では、2022年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（以下、戦略6）における附属学校園アンケートの結果から次年度に向けた改善策を検討する。

II 方法

1 附属学校園のアンケート作成の検討

2020年度、筆者らは7附属学校園に赴き戦略6のプロジェクトの趣旨説明を行い、理解と協力を求め、大学と附属学校園が1つのプロジェクト・チームとしてスタートする素地づくりを行った。

2021年度、附属学校園に所属する研究主任クラスの教員と大学教員及び事務職員によって構成されたプロジェクト・チームが主体となり毎月1回、リモート（夏季休業中は対面）で会議を開催した。そこでは、附属学校園には、学生の教育実習の受け入れのみならず、教育大学の附属機関として、大学における園児、児童、生徒の教育等に関する研究に対して、附属学校園の多大なる協力を得てきた。

今日に至るまで、各附属学校園は独自の実践的研究主題を掲げ、赴任教員の研鑽の場となるとともに、公開授業などの研究発表会により公立学校等の授業実践の質向上に寄与してきた。しかしながら、少子高齢化、デジタル化、グローバル化などの現在の急速な社会変化を考慮すると、これまで以上に大学と附属

学校園の連携が重要になる。とりわけ、大学と附属学校園が一体となる特色を生かした実証研究に取り組み、地域の教育現場への還元を目指すことは重要となる。以上の考えを共有し、その具体策として、各附属学校園の研究会の成果を把握するためのアンケート項目

について検討し、附属特別支援学校と附属岡崎小中学校で先行的にアンケートを実施した。

2022年度は、2021年度で作成したアンケートを実施した。

2 附属学校園のアンケートと実施方法

(1) アンケート項目

研究会にご参加いただいた皆様へ				
愛知教育大学附属〇〇〇学校(幼稚園)				
この度はご参加いただき、誠にありがとうございました。附属学校園の評価並びに研究会の改善のため、皆様のご意見・ご要望をお聞かせ下さい。個人が特定される形で外部への公表は行いません。後日、改めて、活用状況等について、お話を聞かせていただくことがございます。その際にはご協力頂ければ幸いです。				
ご所属	ご芳名			
教員経験年数(数字に○をつけてください) 1. 1～5年 2. 6～10年 3. 11～20年 4. 21年以上				
ご参観授業①【学年・クラス】()年()組【教科・領域】()				
以下の各項目に関しご自身の考えに一番近いものに○をつけてください。	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
【関心度】内容・ねらいに関心があった				
【理解度】内容・ねらいが分かりやすい				
【参考度】今後の教育活動の参考になった				
【活用度】今後の教育活動に活用しやすい				
ご参観授業②【学年・クラス】()年()組【教科・領域】()				
以下の各項目に関しご自身の考えに一番近いものに○をつけてください。	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
【関心度】内容・ねらいに関心があった				
【理解度】内容・ねらいが分かりやすい				
【参考度】今後の教育活動の参考になった				
【活用度】今後の教育活動に活用しやすい				
上記のご評価についての詳細や、その他にご感想やご要望等がありましたら、お聞かせください。				
アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。				

図1 附属学校園のアンケート(印刷版)

図1は、附属学校園のアンケートである。7 附属学校園のすべての研究内容に対応する内容と、参加者の記述や記入に際しての簡便性を考慮し、共通項目として、「関心度」「理解度」「参考度」「活用度」の4つを設定した。また、独自項目として、各附属学校園がこれまで積み重ねてきた研究等に鑑み、独自に参観者の回答を求める項目を設定してもよいこととした。

(2) 実施方法

本アンケートは、2022年における各附属学校園の研究発表会の参加者を対象として、紙面及びwebで実施した。実施時期は附属幼稚園11月2日、附属名古屋小学校5月31日（春の公開授業時）・11月11日（秋の公開授業時）、附属岡崎小学校11月17日と18日、附属名古屋中学校9月22日、附属岡崎中学校9月27日、附属高等学校11月9日、附属特別支援学校11月11日であった。

Ⅲ 結果と考察

1 附属幼稚園

表1は、附属幼稚園の公開保育兼研究発表におけるアンケート回答数と回答者の教員経験年数を示す。

表1 回答者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	29
6～10年	31
11～20年	40
21年以上	19
合計	119

表2 公開保育の集計結果 n=91

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	88	3	0	0
理解度	77	14	0	0
参考度	78	13	0	0
活用度	55	35	1	0

表3 研究発表の集計結果 n=121

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	101	20	0	0
理解度	95	26	0	0
参考度	95	26	0	0
活用度	77	44	0	0

表2は公開保育時に実施したアンケートの

集計結果、表3は研究発表会の際に実施したアンケートの集計結果である。表2と表3の回答者には「不明」、「無回答」、「複数回答」があった。

表1によると、参加者の教員経験年数は、「11～20年」が他項目に比べて最も多くなり、「21年以上」と合わせて参加者全体の約50%を占めた。また、「6～10年」は他項目に比べて2番目に多く、「1年～5年」と合わせて参加者全体の約50%となった。

表2、表3から、参加者の関心の所在等に関し以下のことが看取される。まず、「関心度」は、公開保育における肯定的な回答である「とても思う」は88名であった。これは、全回答者91名の約97%であり、「少し思う」は3名であり、約3%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。また、研究発表における「とても思う」は101名であった。これは、全回答者121名の約83%であった。「少し思う」の20名は約17%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的であったといえ、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、公開保育における肯定的な回答である「とても思う」は77名であった。これは、全回答者91名の約85%であり、「少し思う」は14名であり、約15%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。また、研究発表における「とても思う」は95名であった。これは、全回答者68名の約79%であった。「少し思う」の26名であり、約21%であった。一方、否定的な回答である「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的であり、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、公開保育における肯定的な回答である「とても思う」は78名であった。これは、全回答者91名の約86%であり、「少し思う」は13名であり、約14%であった。一方、否定的な回答である「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。また、研究発表における「とても思う」は95名であった。これは、全回答者68名の約79%であった。「少し思う」の26名であり、約21%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的であったといえ、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、公開保育における肯定的な回答である「とても思う」は55名であった。これは、全回答者91名の約60%であり、「少し思う」は35名であり、約38%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答はなかった。また、研究発表における「とても思う」は77名であった。これは、全回答者121名の約64%であった。「少し思う」の44名であり、約36%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。しかし、「活用度」は、他の3項目と比べると低い。「活用度」と他の3項目の関係と教員経験年数による差の検討は次年度の課題といえる。

2 附属名古屋小学校

表4は、附属名古屋小学校の春と秋の実践研究発表会

におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理した

表4 回答者の教員経験年数

教員経験年数等	春	秋
1～5年	27	3
6～10年	20	6
11～20年	30	15
21年以上	25	16
合計	102	40

表5 春の公開の集計結果

n = 116

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	83	31	2	0
理解度	66	46	4	0
参考度	78	35	3	0
活用度	68	40	8	0

表6 秋の公開の集計結果

n = 72

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	69	3	0	0
理解度	59	11	2	0
参考度	64	8	0	0
活用度	57	15	0	0

ものである。表5は春の公開の集計結果である。また、表6は秋の公開の集計結果である。表5と表6の回答者には「不明」、「複数回答」及び学生や企業等の回答も含まれていた。

参加者の教員経験年数は、春の公開では「11～20年」が他項目に比べて最も多くなり、「21年以上」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約54%を占めた。また、「1～5年」は他項目に比べて2番目に多く、「6～10年」と合わせて参加者全体の約46%となった。また、秋の公開では「21年以上」が他項目に比べて最も多くなり、「11～20年」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約78%を占めた。「1～5年」と「6～10年」と合わせて約22%となった。

「関心度」は、春の公開における肯定的な回答である「とても思う」は83名であった。これは、全回答者116名の約72%であり、「少し思う」は31名であり、約27%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、秋の公開における「とても思う」は69名であった。これは、全回答者72名の96%であった。「少し思う」の3名は4%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的が否定的を大きく上回り、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、春の公開における肯定的な回答である「とても思う」は66名であった。これは、全回答者116名の約57%であり、「少し思う」は46名であり、約40%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は4名であり、約3%であった「全く思わない」の回答はなかった。また、秋の公開における「とても思う」は59名であった。これは、全回答者72名の約82%であった。「少し思う」の11名であり、約15%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、春の公開における肯定的な回答である「とても思う」は78名であった。これは、全回答者116名の約67%であり、「少し思う」は35名であり、約30%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、約3%であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、秋の公開における「とても思う」は64名であった。これは、全回答者68名の約89%であった。「少し思う」の8名であり、約11%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的であったといえ、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、春の公開における肯定的な回答である「とても思う」は68名であった。これは、全回答者68名の約59%であり、「少し思う」は40名であり、34%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は8名であり、7%であった。「全く思わない」の回答はなかった。また、秋の公開における「とても思う」は57名であった。これは、全回答者72名の約79%であった。「少し思う」の15名であり、約21%であった。一方、否定

的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。附属名古屋小は附属幼稚園と同様、「活用度」は、他項目と比べると低い。「活用度」と他項目の関係と教員経験年数による差の検討は次年度の課題といえる。

なお、春及び秋の公開では、live配信を実施した。また、本アンケートでは、教職年数を有する参加者を共有項目とした。そのため、学生や企業等が含まれていない。今後、live配信及び教職年数を有する参加者以外も対象として、広く開かれた研究発表会とする場合、共有項目の再検討が必要であると考ええる。

3 附属岡崎小学校

表7は、附属岡崎小学校の学校研究及び提案授業におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。

教員経験年数	人数
1～5年	91
6～10年	45
11～20年	69
21年以上	40
合計	245

表8 学校研究の集計結果 n=242

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	194	47	1	0
理解度	163	74	5	0
参考度	190	51	1	0
活用度	143	96	3	0

表9 提案授業の集計結果 n=242

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	200	42	0	0
理解度	171	64	5	0
参考度	191	48	2	0
活用度	150	81	9	0

表8は学校研究の集計結果である。また、表9は提案授業の集計結果である。研究の趣旨を説明する学校研究と提案授業は、同日に実施されたものである。

参加者の教員経験年数は、「1～5年」が

他項目に比べて最も多くなり、「6～10年」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約56%を占めた。また、「11年～20年」は他項目に比べて2番目に多く、「21年以上」と合わせて参加者全体の約44%となった。

「関心度」は、学校研究における肯定的な回答である「とても思う」は194名であった。これは、全回答者242名の約80%であり、「少し思う」は47名であり、約19%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、提案授業における「とても思う」は200名であった。これは、全回答者242名の83%であった。「少し思う」の42名は17%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的が否定的を大きく上回り、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、学校研究における肯定的な回答である「とても思う」は163名であった。これは、全回答者242名の約67%であり、「少し思う」は74名であり、約30%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は5名であり、約2%であり、「全く思わない」の回答はなかった。また、提案授業における「とても思う」は171名であった。これは、全回答者242名のうち有効回答数240名（2名が未記入）の約71%であった。「少し思う」の64名であり、約27%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は5名であり、約2%であった。「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、学校研究における肯定的な回答である「とても思う」は190名であった。これは、全回答者242名の約79%であり、「少し思う」は51名であり、約21%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」

は1名であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、提案授業における「とても思う」は191名であった。これは、全回答者242名のうち有効回答数241名（1名が未記入）約79%であった。「少し思う」の48名であり、約20%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であった。「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、学校研究における肯定的な回答である「とても思う」は143名であった。これは、全回答者242名の約59%であり、「少し思う」は96名であり、約40%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、「全く思わない」の回答はなかった。また、提案授業における「とても思う」は150名であった。これは、全回答者242名のうち有効回答数240名（2名が未記入）の約63%であった。「少し思う」の81名であり、約33%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は9名であり、約4%であった。「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。

なお、本アンケートでは、教職年数を有する参加者を共有項目とした。そのため、学生等の72名は含まれていない。教員養成と教員研修の一体化を図るには、共有項目の再検討が必要であると考ええる。

4 附属名古屋中学校

表10は、附属名古屋中学校の研究発表会におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものであ

表10 回答者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	6
6～10年	9
11～20年	11
21年以上	2
合計	28

る。回答者には「不明」及び「無回答」が含まれていた。

表11は学校研究の集計結果である。

表11 学校研究の集計結果 n=34

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	27	6	1	0
理解度	22	11	1	0
参考度	24	8	1	1
活用度	24	8	2	0

参加者の教員経験年数は、「11年～20年」が他項目に比べて最も多くなり、「21年以上」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約46%を占めた。また、「6～10年」は他項目に比べ2番目に多く、「1～5年」と合わせて参加者全体の約54%となった。

「関心度」は、肯定的な回答である「とても思う」は27名であった。これは、全回答者34名の約79%であり、「少し思う」は6名であり、約18%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、肯定的な回答である「とても思う」は22名であった。これは、全回答者34名の約65%であり、「少し思う」は11名であり、約32%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、肯定的な回答である「とても思う」は24名であった。これは、全回答者34名の約71%であり、「少し思う」は8名であり、約24%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名、「全く思わない」の回答数も1名であった。これらのことから、「参考度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、肯定的な回答である「とても思う」は24名であった。これは、全回答者

34名の約71%であり、「少し思う」は8名であり、約24%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であり、「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。

5 附属岡崎中学校

表12は、附属岡崎中学校の公開1と公開2におけるアンケート回答者と教員経験年数を整理したものである。

表12 回答者の教員経験年数

教員経験年数	公開Ⅰの人数	公開Ⅱの人数
1～5年	10	10
6～10年	6	6
11～20年	15	15
21年以上	9	9
合計	40	40

表13 公開1の集計結果 n=34

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	24	9	1	0
理解度	15	17	2	0
参考度	21	12	1	0
活用度	17	12	5	0

表14 公開2の集計結果 n=37

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	26	10	1	0
理解度	17	16	3	0
参考度	23	12	1	0
活用度	17	17	3	0

表13は公開1の集計結果である。また表14は公開2の集計結果である。公開1と公開2は同日にされたものである。

参加者の教員経験年数は、公開1及び公開2ともに、「11年～20年」が他項目に比べて最も多くなり、「21年以上」と合わせて教職経験を有する参加者全体の60%を占めた。また、「1～5年」は他項目に比べて2番目に多く、「6～10年」と合わせて参加者全体の40%となった。

「関心度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は24名であった。これは、全回答者34名の約71%であり、「少し思う」は9名であり、約26%であった。一方、

否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は51名であった。これは、全回答者34名の75%であった。「少し思う」の17名は25%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は15名であった。これは、全回答者34名の約44%であり、「少し思う」は17名であり、50%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であった。「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は17名であった。これは、全回答者37名のうち有効回答数36名（1名が未記入）の約47%であった。「少し思う」の16名であり、約44%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であった。「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は21名であった。これは、全回答者34名の約62%であり、「少し思う」は12名であり、約35%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は23名であった。これは、全回答者37名のうち有効回答数36名（1名が未記入）の約64%であった。「少し思う」の12名であり、約33%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であった。「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、

今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は17名であった。これは、全回答者34名の50%であり、「少し思う」は12名であり、35%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は5名であり、約15%であった。「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は17名であった。これは、全回答者37名の約46%であった。「少し思う」の17名であり、約46%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。

なお、本アンケートは、紙面ではなく Web での回答とした結果、回収率がよくなかった。アンケートの実施方法について検討の余地が残った。

6 附属高等学校

表15は、附属高等学校の公開1と公開2におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものであ

表15 参加者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	11
6～10年	18
11～20年	17
21年以上	17
合計	63

表16 公開1の集計結果

n = 32

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	16	14	2	0
理解度	22	7	3	0
参考度	17	12	3	0
活用度	13	17	2	0

表17 公開2の集計結果

n = 75

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	61	13	1	0
理解度	50	23	3	0
参考度	56	18	1	0
活用度	32	39	3	0

る。回答者には、「不明」及び「無回答」が含まれていた。

表16は公開1のアンケートの集計結果である。表17は公開2の集計結果である。

参加者の教員経験年数は、「6～10年」が他項目に比べて最多で、「1～5年」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約46%を占めた。また、「11年～20年」と「21年以上」は他項目に比べて2番目に多く、合わせて参加者全体の約54%となった。

「関心度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は16名であった。これは、全回答者32名の50%であり、「少し思う」は14名であり、約44%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は61名であった。これは、全回答者75名の約81%であった。「少し思う」の13名は約17%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は22名であった。これは、全回答者32名の約69%であり、「少し思う」は7名であり、約22%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、9%であった。「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は50名であった。これは、全回答者75名のうち有効回答数76（1名が2学級の授業について回答したため）の約66%であった。「少し思う」の23名であり、約30%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、4%であった。「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は17名であった。これは、全回答者32名の約53%であり、「少し思う」は12名であり、約38%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名で、9%であった。「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は56名であった。これは、全回答者75名の約75%であった。「少し思う」の18名であり、約24%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であった。「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は13名であった。これは、全回答者32名の約41%であり、「少し思う」は17名であり、53%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は2名であり、「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は32名であった。これは、全回答者75名のうち有効回答数74名（1名が未記入）の約43%であった。「少し思う」の39名であり、約53%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は3名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。

7 附属特別支援学校

表18 参加者の教員経験年数	
教員経験年数	人数
1～5年	15
6～10年	26
11～20年	11
21年以上	16
合計	68

表18は、附属特別支援学校の公開1と公開2におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。表19は、公開1のアンケートの集計結果である。表20は、公開2の集計結果である。

表19 公開1の集計結果 n=68

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	54	14	0	0
理解度	54	14	0	0
参考度	56	12	0	0
活用度	46	21	1	0

表20 公開2の集計結果 n=68

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	51	17	0	0
理解度	49	18	1	0
参考度	49	19	0	0
活用度	47	20	1	0

参加者の教員経験年数は、「6～10年」が他項目に比べて最も多くなり、「1～5年」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約60%を占めた。また、「21年以上」は他項目に比べて2番目に多く、「11年～20年」と合わせて参加者全体の約40%となった。

「関心度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は54名であった。これは、全回答者68名の約79%であり、「少し思う」は14名であり、約21%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は51名であった。これは、全回答者68名の75%であった。「少し思う」の17名は25%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「関心度」は肯定的であったといえ、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。

「理解度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は54名であった。これは、全回答者68名の約79%であり、「少し思う」は14名であり、約21%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は49名であった。これは、全回答者68名の約72%であった。「少し思う」の18名であり、約26%であった。一

方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「理解度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「参考度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は56名であった。これは、全回答者68名の約82%であり、「少し思う」は12名であり、約18%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答数はなかった。また、公開2における「とても思う」は49名であった。これは、全回答者68名の約72%であった。「少し思う」の19名であり、約28%であった。これらのことから、一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」と「全く思わない」の回答はなかった。これらのことから、「参考度」は肯定的であったといえ、今後の教育活動に参考になったといえる。

「活用度」は、公開1における肯定的な回答である「とても思う」は46名であった。これは、全回答者68名の約68%であり、「少し思う」は21名であり、31%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答はなかった。また、公開2における「とても思う」は47名であった。これは、全回答者68名の約69%であった。「少し思う」の20名であり、約29%であった。一方、否定的な回答を示す「あまり思わない」は1名であり、「全く思わない」の回答数はなかった。これらのことから、「活用度」は肯定的が否定的を大幅に上回り、今後の教育活動に活用しやすい内容であったといえる。

Ⅲ 結論と今後の課題

以上、本稿では、2022年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）における附属学校園アンケートの結果から次年度への改善策を検討した。

7 附属学校園の研究発表会は「関心度・理解度・参考度・活用度」の4項目すべてにおいて、肯定的な回答が否定的な回答を上回ることできた。この回答者の教員経験年数は、「1年～5年」「6～10年」「11～20年」「21年以上」の区分において、大きな偏りがなかった。そのため、どの教員経験年数にも対応する研究内容であったと考える。しかし、「活用度」は、他項目と比べると低い。「活用度」と他項目の関係と教員経験年数による差の検討は次年度の課題といえる。また、回答者数が、そのまま研究発表会の参加者数を示していない。紙面の方がWEBよりも回収率が高いことが明らかとなったため、次年度以降の対応が実施上の課題である。また、学生や教職以外の方々を加味した所属欄の作成も今後の課題となる。それでも、こうした課題も含め、アンケート結果は、2022年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）における検討対象となり、大学と附属学校園が一体となる特色を生かした実証研究に取り組む素地づくりになったことは、次年度への架け橋となると考える。

なお、2022年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）のメンバーは、次の通りである。

杉浦慶一郎（連携・附属学校担当理事）
 鈴木一成（保健体育講座）
 真島聖子（社会科教育講座・学長補佐）
 小塚良孝（外国語教育講座・副学長）
 西垣祥子（附属幼稚園・研究主任）
 笠巻一倫（附属名古屋小学校・研究主任）
 稲垣修一（附属岡崎小学校・研究主任）
 佐野嘉昭（附属名古屋中学校・研究主任）
 奥村 仁（附属岡崎中学校・教務主任）
 鈴木哲也（附属特別支援学校・研究主任）
 川瀬英幹（附属高等学校・研究主任）
 佐藤重成（附属学校課課長）
 鬼頭百合子（附属学校課副課長）